半導体・電気情報通信工学科　井口　傑

「公孫龍巻一から巻四」　　宮城谷昌光　著　　新潮社　出版社　　２０２４年３月発行

今回紹介する宮城谷昌光の『公孫龍（こうそんりょう）』は、私自身、そんなことを改めて考えさせられた歴史小説です。

舞台は、漫画『キングダム』でもおなじみの中国の戦国時代です。ただし、描かれているのは『キングダム』の主な物語よりも数十年前の世界です。宮廷の陰謀によって命を狙われた王子・公孫龍は、身分を捨て、商人として生きる道を選びます。その後、さまざまな人々と出会い、経験を重ねながら成長し、やがて国の行く末にも関わっていきます。全四巻の長編ですが、先の展開が気になり、私は一気に読み終えてしまいました。

この作品で特に印象に残ったのは、公孫龍の人との向き合い方です。自分の利益や出世を第一に考えるのではなく、自分を助け、信じてくれた人々のために力を尽くそうとします。もちろん、思いどおりに物事が進むわけではありません。それでも、人とのつながりを大切にし、自分にできることを考えて行動する姿に、私もこうありたいと感じました。

私たちは、自分の進む道を考えるとき、何をしたいのか、何に向いているのかと、自分自身に目を向けがちです。しかし、公孫龍の生き方を読んでいると、人との出会いや、誰かのために行動する経験の中から、自分の進む道が見えてくることもあるのではないかと思います。

もう一つ興味深かったのは、戦いや政治だけでなく、商業やものづくりが国を支える力として描かれていることです。人が集まり、物がつくられ、商いを通じて各地が結ばれていく。そうした営みが社会を動かしていく様子は、技術を学ぶ高専生にも、ぜひ読んでほしいところです。

高専では、専門的な知識や技術を身につけることを大切にしています。しかし、それらを身につけた先に、誰のために、何に役立てるのかを考えることも大切だと思っています。これは学生だけでなく、教育に携わる私自身にも当てはまることです。

『公孫龍』は、歴史小説として十分に楽しめる作品です。歴史に詳しくなくても、主人公の歩みを追いながら読み進められると思います。ぜひ手に取ってみてください。読み終えたとき、自分の生き方について、少し考えてみたくなるかもしれません。